

一神教は危ないか

奨励	春名 康範〔はるな・やすのり〕
奨励者紹介	日本キリスト教団天満教会牧師

さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』」そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

(マタイによる福音書 19章16—22節)

最近よく「一神教は危ない」という発言が日本国内であるように思います。何ををもってそういうことが言われているのか、目にするたびに注意しているのですが、「キリスト教もイスラム教も争っている」ということが書かれています。それでは多神教の世界や無神論の世界では争いはないのかというと、そうではありません。日本のジャーナリストには宗教に対する教養がある人が少ないのか、ことさらに宗教対立のように書きたてると読者が喜ぶのか、中東や北アフリカにおける最近の紛争も宗教紛争のように報道されることが多いですが、本当は経済紛争です。石油を取り囲む利害や富の偏りによる生活苦が紛争を起こしているとは私は理解しています。

筑波大学で昔、不審死を遂げた五十嵐一という人が『摩擦に立つ文明』という本を書かれています。彼は「存在するものはすべて摩擦を起こす。個人であれ国家であれ、文化摩擦を起こす」と書いています。物と物がこれれば摩擦熱が発生するように、人間も国家も文明も異なるものと遭遇すると摩擦を起こすのです。大事なことは、存在するものはすべて摩擦を起こすということを認めて、摩擦を解決するためにどうしたら良いかと考えることです。利益や権力が片方や一部に偏ると、摩擦が発生します。一方の文化が他方に強制されると、摩擦が起こります。

今朝は、「一神教は危ないか」という題でお話をさせていただきますが、私はキリスト教の牧師ですから「一神教は危ない」というわけがありません。結論は「危なくない」に決まっていますが、なぜ危なくないのかをお話してみたいと思います。

只今、一緒に拝読しました聖書、マタイによる福音書19章16—22節には一人の金持ちの青年がイエスに近寄ってきて、「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか」と尋ねたことが記されています。「永遠の命」とは、必ずしも死なない命のことではなく、命の充実、質の深い命を指すことは、「ゾーエーン アイオーニオン」という言葉が使われていて、質的な命を指すことから言えます。きっとこの人は、日々の生活に喜びとか生きがいを感じなかったのではないかと思います。

この人のことを金持ちの青年であったと紹介していますが、別の福音書では議員であったとも書いています。金持ちで若くて議員とくると「3高」ではないですか。昔は、背が高い、学歴が高い、収入が高い3高が女性の結婚相手に求める理想であったと言われています。近頃は、「3低が良い」と言われているそうです。わたしなんか、家で食事中にオナラをすくと娘から「最低」と言われていますので、理想的な男性なのかと思っていましたら、低姿勢、低依存、低リスクのことで最低が良いということではないみたいです。それならば、金持ちなら低リスク、議員なら低姿勢、若者なら低依存の可能性がお年寄りよりも高いかもしれませんが、女性たちから見ても合格圏に近い人かもしれませんが、生きていても生きがいを感じられず、何をしたら生きている喜びを感じられるようになるのかと苦しんでいたようです。

先日、ある人と話していたら、「つまらない」「つまらない」というのです。私と一緒に話していてもつまらないのかと思って、「何がつまらないの」と聞きましたら、「いろいろしても」と言いました。「何を詰めたいの」と聞きましたら、「わからない」と言いました。仕事もして、勉強もして、ボランティアもいろいろやっているけれども、スケジュールは詰まっているが、何かが欠けているような虚しさを感じるというのです。何かが欠けている。詰まるべきものが詰まっていない、それが「つまらない」という気持ちになってその人を苦しめているようでした。若くて、才能があって、他の人から見ると羨ましいような人なのに、ご本人は自分はつまらない日々を生きていると感じておられるのです。

もしかすると、イエスの所を訪ねた若者も他の人から見ると羨ましいようなセレブなのにご本人は生きている喜びを感じないで、「つまらない」と感じていたのかもしれない。

善を求めて

そんな彼に向かってイエスは、「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである」と言われました。勿論、この場合「善い方」とは神様を指していることは間違いないと思います。神様だけが善い方であって、他の者はみんな善くはないと言われたのです。

漢字で「善い」という字は、羊を書いて下に言葉の言という字を並べて書きます。これは、羊を神様に捧げて、二人の人が互いに言葉を交わし、共に生きるということを表しているそうです。偉大なる創造者である神こそが絶対者で、それ以外のものはみんな相対的で、欠けが多く、時間がたてば風化して滅んでしまうものである。それが、正義にしても、宗教にしても、権力にしても、文明にしても、みんな一時期存在するもので、間違いや欠点の多いものであり、人間にとって「善いこと」とは、そのような神の前に謙虚になって、自分の考えや立場、信仰や思想を相対化して他の人と言葉を交わして共に生きることであるということです。その善いことを実現されたのは神ご自身であって、神はイエスという人間の姿になられてわれわれ人間と対話をされたのだと考えて、他者との対話をすることが一番大事なことで、生きがいを見出す道でもあると説いているのがイエスの示されたキリスト教であると思います。

勿論、キリスト教を名乗っていても、他のキリスト教や宗教を撃退することが神への誠実であると考えている人びともおられるように思いますが、それはキリストの心を誤解している人びとであると思います。イエスが、私たちに示した真実は、人間はみな無理解で誤解をする生き物で、見当違いな考えにとらわれ、人を殺し、人の物を盗み、嘘を言い、親を愛せない人間になる可能性をもっている生き物であるということです。だから、私たちは自分の考えや感情を相対化して、人の考えや立場に立とうとして、もう一度自分の考えていることや、言おうとしていること、しようとしていることを考え直してみることが必要なのです。

対話って聴くこと

私は、今年の3月まで京都市左京区修学院にあります関西セミナーハウスという所の活動センター所長をしていました。この施設は、日本クリスチャン・アカデミーに属しています。クリスチャン・アカデミーはドイツで生まれました。第2次世界大戦のあと、ドイツではなぜ自分たちがユダヤ人の虐殺や精神障害者の虐殺や、同性愛者の虐殺をしたのであろうかと深い反省をして、異なった文化・思想・宗教・民族に属する人びとと対話しなければいけないと気がついたのです。それで、国内はもとより世界中に対話のために施設を造り、対話運動を始めたのです。世界の平和は、武力や経済力で生まれるものではなく、この対話によるほかないと考えて、日本でもアカデミー運動が展開されてきたのであります。

現在、日本クリスチャン・アカデミーの理事長をしておられるのは、元同志社大学の教授であったシュベネマン・クラウス先生です。皆さんも、曼殊院と修学院離宮の間にある「関西セミナーハウス」をゼミや合宿に利用して、素敵な環境のなかで「対話」をしてください。

私の尊敬するotto・フリードリッヒ・ボルノーという先生が、『対話への教育』という著書の中で「対話とは、もしかすると自分の方が間違っているかもしれないという可能性を残して相手の言うことを聴くことである」と言っています。彼は、「議論」というのは相手との違いを明らかにすればするほど面白話し合いであり、「交渉」とは自分の信念を曲げて相手との合意点を見つけなければ意味がない話し合いであるが、「対話」とは自分の考えていたことを修正する勇氣をもって相手の話すことを聴くことであると整理しています。私は自分を相対化して、相手の言うことを聴くことができる人間を育てることこそが教育であると考えておられるボルノーの考えに大いに感化を受けました。それは、神だけが絶対者でそれ以外のものは相対的である、神のことを理解しているつもりの人間の理解も相対的であると言われたと思われるイエスの「善い方はおひとりである」というお言葉とも通じるものがあると思います。

皆さんが、同志社大学で学ばれるということは、就職の準備などではなく、人生を豊かにし、世界を平和にしていこうとします。若くして、金持ちで、地位があり、人びとから羨ましがられるセレブになっても詰まりません。何かが欠けている。何かが抜けている。詰まるべきものが詰まっていない、という感じを拭いきれないと思います。詰まっていないものを詰めてくれるのは、「対話」です。自分の考えや立場を絶対化しないで、ただ神だけを絶対的なものとして、自分も相手も相対的なものと考えて、聴く心をもって向かい合う、すると自分に抜けていたもの、気が付かなかったことが気づけて、豊かな人生が与えられます。

一神教とは何かということに関して、誤解があると思います。キリスト教ならキリスト教の神だけが唯一の神で、あとは偽物、邪教だから撲滅すべきであると考えているのが一神教だと思っている人もおられるようですが、そうではありません。キリスト教が理解している神だろうが、イスラム教が理解している神だろうが、間に向かって心を研ぎ澄ましていると何かが感じられます。「それが日本の心です」と宣伝されている日本の神だろうが、みんな相対的なのだというのが一神教の本当の意味です。神はお一人で、われわれの理解が有限な文化や知識の制限を受けた産物であるがゆえに、相対的なのです。

神お一人だけが善なるお方であるという理解に立ち、われわれは他の文化や宗教、思想や学問に心を開いて聴かなければならないというのが一神教の意味であります。ゆえに、一神教は危ないのではなく、学問や平和や対話の基礎なのであります。

皆さんが、これを機会に教会を訪ねて、キリスト教の門をたたいてくださることを願っています。同志社の創立者、新島襄もキリスト教との出会いを通して、新しい風を日本に送り込みました。私が牧師をしている天満教会も皆さんのお越しを歓迎します。